

大学教育学会 課題研究活動報告書 (2021 年度)

提出日 2022 年 3 月 22 日

報告者 深堀 聰子

課題研究テーマ	学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じたエキスパート・ジャッジメントの涵養と大学組織の変容
代表者 (所属)	深堀聰子 (九州大学)
メンバー (所属)	深堀聰子 (九州大学), 松下佳代 (京都大学), 伊藤通子 (東京都市大学), 中島英博 (名古屋大学), 佐藤万知 (広島大学), 田中一孝 (桜美林大学), 畑野快 (大阪府立大学), 斎藤有吾 (新潟大学), 長沼祥太郎 (九州大学)
担当理事	松下佳代 (京都大学)
コメンテーター (所属)	濱名篤 (関西国際大学)
実施した活動	<p>本課題研究では、教育のデザインと評価にかかる大学教員の専門性 (エキスパート・ジャッジメント) を鍛えることを通して、大学組織はいかに学修者本位の教育 (学習システム・パラダイム) への転換を果たし得るのか (RQ1), その転換を導く上で鍵となる条件とはいかなるものか (RQ2) を明らかにすることを目指している。大学教員と大学組織の変容を捉える方法論として、学修成果アセスメント・ツールの開発・共有・活用の取組について調査・支援する点に、本実践的研究のオリジナリティがある。そして、研究の成果を踏まえて、大学教員の変容と大学組織の変容を繋ぐ教学マネジメントのモデルを構築することに、本研究の問題関心がある。2021 年度には、先行研究のレビューに基づいて構築してきた理論的枠組みと方法論に基づき、国内の二つのフィールド (大学) における実践的研究を発展させた。大学の協力を得て推進する実践的研究は、コロナ禍の中で、必ずしも予定通り進捗しなかった。2021 年度課題研究シンポジウムでは、3 年間の研究の成果と残された課題を整理することで、本課題研究を一旦締めくくった。残された課題については継続して取り組み、次年度以降のラウンドテーブルにおいて報告する。</p> <p>なお、本課題研究の成果の発表の一環として、本学会後援を受けた国際シンポジウム 「ウィズコロナ時代に高等教育は何を保証するのか (Learner-centred Education and Higher Education Quality Assurance Amid Covid)」 (2022 年 2 月 23 日・九州大学〈オンライン〉) を開催した。</p>

<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大学教育学会第 43 大会ラウンドテーブル（2021 年 6 月 5 日@関西大学〈オンライン〉）「学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じたエキスパート・ジャッジメントの涵養と大学組織の変容—実践的研究から導かれる示唆—」</li> <li>● 『大学教育学会誌』第 43 巻第 2 号〈ラウンドテーブル報告〉深堀聰子・松下佳代・伊藤通子・中島英博・田中一孝「学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じたエキスパート・ジャッジメントの涵養と大学組織の変容—実践的研究から導かれる示唆—」</li> <li>● 大学教育学会 2021 年度課題研究集会課題研究シンポジウム I（2021 年 11 月 28 日@芝浦工業大学〈オンライン〉）学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じたエキスパート・ジャッジメントの涵養と大学組織の変容—課題研究の成果と今後の展望—</li> <li>● 大学教育学会誌第 44 巻 1 号〈課題研究シンポジウム I〉        深堀聰子「学修者本位の教育への転換の要件—趣旨説明と研究の軌跡」        伊藤通子・松下佳代・中島英博・斎藤有吾「理工系総合大学での統合的科目『SD PBL』における PEPA」        中島英博・深堀聰子・田中一孝・斎藤有吾・長沼祥太郎「Tuning テスト問題バンクの教学マネジメントへの活用」        佐藤万知・中島英博・長沼祥太郎・畑野快・斎藤有吾「実践的研究の基盤となった理論・実証研究の再整理」        松下佳代「実践的研究から導かれる暫定的な結論 I—理工系総合大学での実践的研究（PEPA と PBL を中心に）—」        深堀聰子「実践的研究から導かれる暫定的な結論 II—Tuning テスト問題バンクの教学マネジメントへの活用—」        田中一孝「コメントとディスカッション」        深堀聰子「残された課題と今後の展望」</li> <li>● 国際シンポジウム「ウィズコロナ時代に高等教育は何を保証するのか（Learner-centred Education and Higher Education Quality Assurance Amid Covid）」（2022 年 2 月 23 日・九州大学〈オンライン〉）        深堀聰子・畑野快・長沼祥太郎「学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じたエキスパート・ジャッジメントの涵養と大学組織の変容—研究の枠組みと尺度開発」        伊藤通子・松下佳代・斎藤有吾「理工系総合大学での実践的研究—PEPA と PBL を中心に—」        中島英博・深堀聰子「学修者本位の教育を目指す個人と組織の変容を促す要件・支援—九州大学の事例」        佐藤万知「個・集団・組織の相互作用と組織変容—国際調査からの示唆—」</li> </ul>
-----------	--

残された課題	<p>本研究において展開する実践的研究を通して、個人変容と組織変容のプロセスの多様性であり、その中で、本研究で援用してきた概念や枠組みでは十分に説明したり、解明したりできそうにない限界も明らかになってきた。実践の場で展開する個人変容と組織変容のプロセスをよりの確に捉えるための修整を加えたうえで、実践的研究を完遂することを通して、研究課題を明らかにし、大学教員の変容と大学組織の変容を繋ぐ教学マネジメントのモデルを構築したい。</p>
--------	---